

Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0003 福岡市中央区春吉
1-16-8 VEGA天神南601号
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

No.139

2019年4月1日

〈URL〉 <http://www.peshawar-pms.com> 〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



表紙絵 アショカ碑文と麦の収穫 (2019年カレンダーより) /画・甲斐大策

悲願の山田堰モデル、完成へ	中村 哲
日本で学んだことをガンペリで実践	アジュマル スタニクザイ
地元住民の雇用で工事はスムーズに	カービル
現地活動の来し方を学んだ旅	浦田葛平
PMS水利事業は紛争解決策の道標	七里富雄
PMS訓練所の受講生によるトレーニングの感想	
水のよもやま話 番外・飢餓の国vs飽食の国	中村 哲

【カラー連載】 マルワリード用水路を行く①取水堰・取水門～B地区 (0～900m地点)

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

悲願の山田堰モデル、完成へ

干ばつによる飢餓が蔓延するなか、カマ堰、九年目の完工

PMS（平和医療団・日本）総院長／ペシャワール会現地代表 中村 哲

断続的に雨

お元気ででしょうか。当地はまともな雨が三年間降らず、干ばつによる飢餓が蔓延^{まんえん}、多くの国内避難民が発生していましたが、昨年暮れから断続的に雨が降り、北部山岳地帯は豪雪に見舞われました。このため、干ばつは一時緩和し、心なしか人々に安堵の表情が読み取れます。

しかし、過去にもこのような動揺をくり返しながら深刻化していた干ばつです。気を緩めず、備えを続けたいと思います。

PMS方式とカマ堰完成の意義

現地事業の流れは、二〇〇三年から始まった「緑の大地計画」がほぼ予定通り進行、現在その後に備えて準備が進められていま

す。多少の時間的ずれはありますが、具体的には灌漑事業^{かんがい}を三期に分けると理解しやすいです。

I マルワリード用水路建設（2003～2010）

II ナンガラハル州北部穀倉地帯の復活・

取水堰の研究と建設（2008～現在）

III PMS方式の他地域への応用、普及活動（2018～現在）

現在、安定灌漑はナンガラハル州の三郡（クズクナルシエイワ、カマ、ベスード）のほぼ全域、約一万六千ヘクタールをカバーし、一部の地域で最終的な改修工事が行われ、水利施設がPMSの管理から離れ、地域（住民と関連行政組織）に引き渡されます。

他方、ミラーン訓練所建設（二〇一八年

竣工）に始まる動きが今後の普及活動です。こちらはFAO（国連食糧農業機構）との共同事業で、二〇一八年一月からPMS方式の紹介、実地見学が行われています。この一年で、地域農民指導者、各州レベルの技官、地域の伝統的水主（みずぬし）らを対象に、二二〇名が受講、干ばつ克服の切り札として高い関心を集めました。

この普及活動の大前提が、「PMS方式の完成」でした。PMS方式とは、取水堰^{とぎ}・取水門・主幹用水路・沈砂池からなる一連の取水設備（＝頭首工^{とうしゅこう}）、および護岸方法です。とくに最大の構造物である斜め堰は多大の時間と労力をかけ、昨年から改修されたカマ堰を以て「完成形」となるに至っています。多少説明が要ります。

温暖化による河川の変化と村落の荒廃

二〇〇三年に建設が始まったマルワリード用水路は、初期の頃、殆ど取水堰に関心が払われていませんでした。それほど厄介なものだとは思わなかったのです。しかし、年月が経つうち、最大の難関は取水堰だと身に染みて分かってきました。大川川もまた気候変動の影響で、手のつけられぬ暴れ川になっていったからです。

マルワリード用水路流域は、かつて小河



カマ第一堰土砂吐き(2019年1月24日)。取水門前に土砂が堆積しないように、大量に土砂を含む底水を急流で流すと共にクナル河の水位が異常に低い時は、堰板を入れ取水量を確保する。

川からのジュイー(伝統的な小水路)、地下水由来のカレーズで潤されていましたが、小河川・地下水共に涸れ、残るは大河川からの取水以外にありませんでした。初め、要するに水を引けばよいと考え、用水路は、どんどん伸ばされていきました。ところが、灌漑によって緑が広がり、村々が復活し始めるところまでは嬉しいのですが、取水堰は毎年改修が必要な状態で、とても住民へ譲渡できるものではありませんでした。住民自身の手で維持できることが絶対条件の一つだったので、この取水堰の技術的完成が大きな課題となりました。復活した村々が繁栄すればするほど、取水堰の不備が悪夢となりました。

用水路工事の際、ギリシャ系王朝時代の農村跡に何度も遭遇しました。何れも河川の変化で取水できず、遺跡となって埋もれていったものでした。

用水路は取り込んだ水を運ぶので、自在に作り、維持できます。しかし、自然の猛威と直接対峙する設備はそうはいきません。特に温暖化の影響はクナル河でも激烈で、渇水と大洪水が極端な形で同居していました。厳密には降雨減少ではなく、「降雨偏在」です。つまり、全体としては乾燥化でも、時間的・場所的に少ないスポットに激



石張り面積25,000㎡の山田堰

烈な集中豪雨が襲い、降れば記録的な雨量
でしばしば大被害が発生します。

このため、昔からあった川沿いの村落で
も取水が困難となると同時に洪水被害が頻
発し、廃村が広がっていたのでした。

悲願、安定した取水設備！

カマ堰着工と試行錯誤

取水堰は二〇〇八年以後、次々と建設さ
れましたが、実際には改修を繰り返して、泥

沼の様相を呈していました。朝倉市の山田
堰をモデルとすることが初めからの目標で
した。電力が利用できず、土木資機材の搬
入が困難で、単純機械による建設、地元住
民自身による維持を考えたととき、これに優
るものはないと思われたからです。

しかし、事はそれほど簡単ではありません。
研究と建設が同時などとは日本では考えら
れませんが、作った堰を水理実験モデルの
ように扱い、改修を重ねながら改良、完成
度を高めていきました。クナールの大河を
相手に、要するに試行錯誤です。毎年夏の
増水期に洪水が襲って壊し、冬の渇水期に
弱点を見ながら改修するのです。

二〇一〇年に着工したカマ堰で、PMS
方式が最初に組織的に導入されました。同
堰は二つの堰からなり、流域は農地面積が
七〇〇〇ヘクタール、三〇万人が住むアフ
ガン東部最大の農村地帯です。しかし、こ
こも廃村が広がり、着工時は農地の半分以
上が沙漠化し、住民の多くが難民化してい
たのです。この工事は過去多くの者が努力
したものの成功例がなく、「取水堰は不可
能」とされてきました。旧ソ連（ロシア）、
米国やアラブ系、国連系など、多くの者が
挑んで結局失敗しています。夏の濁流が堰
を壊すと同時に、大量の土砂が流入、水路



PMS方式取水システムのモデルとなった山田堰（福岡県朝倉市）

を埋め潰してしまうからです。ダムを作る
ほどの技術はあるのに、取水堰はうまくゆ
きませんでした。

二〇一二年、PMSは斜め堰方式を採用
して一時的に成功を収めました。三年のう
ちに全流域が復活し、住民の殆どが戻って
います。しかし、堰の不備を補うべく、地
元への譲渡まで五年以上の観察期間を置き、
改善を重ねていきました。作っては壊れ、壊
れては直し、賽の河原のような努力が続

ました。その間、気が気ではありませんでした。

山田堰モデル実現へ

それでも、経験を重ねるにつれ、PMSの施工技術が向上し、クナール河の動きが明らかにになり、これまでの堰の弱点が少しずつ克服されていきました。自然河川を相手にする堰に厳密には完成はありませんが、やっと最近になってある程度の耐久性と機能を備えたものができるようになり、これを「標準設計」とするに至りました。詳細は割愛しますが、専門家筋とも協力しながら、図面上の標準化を進めています。

堰は鉄筋コンクリート製の砂吐と巨礫による人工河道（洪水吐）を持ち、異常渇水時には堰板で水門付近の水位調整を図ることでできる、一種の「部分可動堰」です。堰幅は約二二〇m、河道幅の二倍以上をとって越流水深を浅くし、水の破壊力を減らします。堰長は五〇〜一四〇m、石張り面積一万四千m²の強靱なもので、大量の巨礫を積み重ねています。堰に投ぜられた石量は、今回の改修では一〇トン積み大型ダンプカーで約四千五百台分、過去のを合わせると約八千台分以上となります。総工費の半分がこの石材輸送に使われ、その成否も

工事に影響します。

「おお、これはヤマダの!」

二〇一九年二月、二つの堰は最終工事を終了、美しい姿を現しました。冬のクナール河は清流です。一万四千m²の堰の表面は一枚の板の如く、透明な流水が洗っていきます。晴れた日は天空の色を映して青く、真つ白な荒瀬が踊ります。

「おお、これはヤマダの!」

既に朝倉の地を訪れて山田堰を見た職員、ジャ先生やファヒム技師が思わず叫びました。山田堰の機能を徹底的に模倣したせいか、形が非常に似ています。この一年、彼らもまた普及活動に奔走し、現地で確実なPMS方式を公的機関に訴えようとしていたところでした。折よく最後の難関であった堰の標準設計が成り、これによってPMSの活動は一つの段階を超え、次に備えたと言えます。

カマ堰着工の二〇一〇年から、事実上の竣工まで九年の歳月が流れていました。事は技術だけではありません。普通、このような試行錯誤はよほどのことがないと許されません。この忍耐を支えたのは、住民たちの協力と日本からの支援でした。山田堰を造った先人たちの悲願がここに漂ってい

る気がしてなりませんでした。
みなさんのご厚意にここから感謝し、更に恩恵が広がるべく、力を尽くします。

*9頁のカマ堰全景の写真をご参照下さい。



中村 哲（ななかみ てつ）九州大学医学部卒。専門は神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て一九八四年パキスタン

のカイバル・パクトウンクワ州（旧北西境界州）の州都ベシャワールに赴任。ハンセン病コントロール計画を柱にした貧困層の診療に携る。八六年からはアフガン難民のための事業を設立し、アフガン北東山岳部に三つの診療所を開設。九八年には基地病院PMSをベシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大干ばつ対策のための水源確保（井戸掘り・カレイズの復旧。作業地千六百カ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を開始。〇三年三月からは灌漑水利計画に着手し、一〇年三月全長約二五キロが開通。ダラエヌール診療所の年間診療数約四四、五〇〇人（二〇一七年度）。

◎現地スタッフからの便り

日本で学んだことを ガンベリで実践

PMS農業事業責任者
アジュマル スタニクザイ

労働管理と植樹

私はモハマッドグルの息子でアジュマルスタニクザイと言います。一九八〇年にソルフロッド郡カクラック村で生まれました。ソルフロッド郡で初等教育を終え、二〇〇二年にナンガラハル大学農学部を卒業しました。

卒業後、故郷に戻り農場で働いていた頃、PMSが井戸掘りプロジェクトを進めていました。そのプロジェクトで日雇いの作業員として数日働きました。その後マルワリード用水路建設が始まることを知り、PMSで働きたいと思いました。何故ならPMSは私たちの故郷でかつてない支援事業を行い、感銘を受けていたからです。そして就職試験のための書類をPMS事務所に提出しました。面接を受け、二〇〇三年にマ

ルワリード用水路現場技師として雇用されました。PMSの活動に参加し働けるようになり、とても嬉しく思いました。

私の任務は作業員の労働管理でした。水路一キロメートルが建設されD地区に到達すると、中村先生の指示に従い、日本人ワーカーの神戸さんと水路兩岸に柳の挿し木を始めました。現場では柳の枝が手に入らなかつたので、他の地域から運んできて用水路壁の護岸用に植樹しました。

マルワリード用水路始点から終点までの谷や必要と思われる所に、私たちはユーカリ、桑、紅柳（ガス）、シーシャム、ビエラなどを植樹して周辺地域を洪水の害から守るようになりました。またシスター藤田に助けて頂いて、D地区にあんず、すもも、オリーブの林を作りました。これによって乾燥地が緑豊かな美しい環境へ変化していきました。

ガンベリ沙漠を農地に

二〇〇八年には育苗場を設け、種々の苗作りをして、用水路各地区の植樹に使用しました。苗作りのトレーニングも大勢の作業員に行いました。ユーカリ、紅柳、杉、桑などをこの育苗場で栽培し、ガンベリ沙漠

などでも利用しました。

翌年は中村先生とジア先生に相談して、長さ約四五〇m、幅約二〇〇mの人工林をガンベリ沙漠に植樹したことで、現地の気候にも好影響をもたらし、燃料材や牧草地としても活用できています。

さらに、蜂蜜のために六ヘクタールのビエラの林も造成しました。将来蜂蜜の生産も可能になります。

二〇一〇年にはガンベリ沙漠を農地に変える事業が開始し、土壌検査も二回行いました。検査結果をもとに、痩せた土壌を肥やし、ph値を調整するために米の栽培をしました。

二〇一二年には様々な農園造りを始めました。ガンベリ沙漠は砂地で柑橘類に適しているため、二六七ジェリブ（五三・四ha）の土地にレモン、オレンジ、スイートオレンジ、ナツメヤシなどの果樹園を建設。今ではレモンやオレンジは市場に供給しています。果樹園では作業員たちに雇用の機会も提供しています。

また家畜の飼育も牛七頭から開始しました。現在、乳牛一五頭、メスの子牛二〇頭、オスの子牛九頭に増え、毎日市場に一〇〇kgの牛乳を供給しています。家畜の糞は農地や果樹園で利用しています。

ガンベリ沙漠に建設した公園は住民の憩いの場となっています。日々多くの人がこの



山田堰土地改良区事務所で、唐箕や足踏み脱穀機の使い方を研修するアジュマル農業技師（右から3人目、2018年11月14日）

公園を訪れて、楽しいひと時を過ごしています。沙漠化で一度消滅した黒砂糖の製造を復旧するべく、ガンベリ沙漠にサトウキビ農園と黒砂糖製造所も建設しました。ここには毎年黒砂糖の好きな人が訪れています。また二〇〇ジェリブ（四〇ha）の農地では小麦、三〇ジェリブ（四・三ha）では米が栽培され収穫量も良好です。

PMSが建設したシェイワ、カシコート、シギ、カシマバード、カマI、カマII、ミラーン、マルワリードII取水口周辺、ベスード護岸壁、ガンベリ沙漠に合計百万本に近い樹木が植えられました。ガンベリ農場

のF地区では現在も開墾が進んでいます。
仕事が生生活をポジティブに

私は、二〇一七年一〇月二六日にJICA（国際協力機構）の招待で日本を訪問して会議に参加しました。その際に山田堰を見学することができました。

初日はシエトラウ村とカチャラ村で行った農業・農村社会事前調査結果についての相談・意見交換をしました。別の日にはCTI（株式会社建設技術インターナショナル）の細野先生から野菜の栽培法、灌漑、輪作、土壌構造の基本知識、植物の酸素不足について、さらに野菜や果物の乾燥法についても教えて頂きました。畑に出てカラーチャートを使って稲の葉色を検査する方法を習いました。CTI及びテクノ社の方々は、トータルステーション（測量器）を使って測量の実践的トレーニングも受けました。教えて頂いた事をガンベリの農場で実践しました。

二〇一八年一月に二度目の日本訪問をした時に経過を報告し、細野先生に助言を受け、意見交換もしました。こうして学んだことは全て、ガンベリの農場で実施し、地域住民とも情報を共有しています。

ここで私の個人的なお話したいと思っています。私は結婚しており娘二人息子二人、計四人の子供がいます。両親、親戚

と同居しています。私は今の自分の生活にも、私の生活にポジティブな変化をもたらしてくれた仕事にも一〇〇%満足しています。私はどんなことがあってもPMSを支えていく覚悟でいます。

最後になりましたが、ペシャワール会、そして日本の皆様に対してアフガニスタンを支援してくださることに感謝申しあげます。そしてPMSを誇りに思っています。ありがとうございます。

ありがとうございます。

▼寄付をしてくださる皆さま

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願い致します。

▼現地活動を紹介するパンフレットをお送りします

*ペシャワール会の活動をご紹介されるときにお使いいただけるものです（払込用紙がついています）。ご希望の方は遠慮なく事務局にお申し越し下さい。パンフレットはA3変形を四折りしたもので、長形の定形封筒に入るカラー版です。なお、パンフレット、会報等は受け取る意思のある方への配布を原則としております（ポスティング等は行わないこととしております）。

地元住民の雇用で

工事はスムーズに

PMS会計担当

カービル

会計職員としてPMSへ

私はアフマドジャンの息子でカービルです。一九七一年、ナンガラハル州ソルフロッド郡シャムシャプール村の知識階層の家に生まれました。学校卒業後は自営業に忙しくしていました。その後、英語とコンピュータを一年間学び、さらにファイナンスのコースを修了しました。その後数年間は様々な語学学校で働きました。

二〇〇七年、会計職員としてPMSに入るための採用試験を受けました。それまで会計作業でコンピュータの操作をしたこともなければ、工事現場作業員に給与を渡す仕事もしたことがありませんでした。

当時PMSはナンガラハル州のソルフロッド、ベスード、カマ、シェイワなど各地で井戸掘りなど様々な事業を実施していました。また、当時、ダラエヌールで行っていた農業プロジェクトは、シェイワ郡の

ガンベリ沙漠へ移し、農地開墾や野菜の栽培など、現在も活動を続けています。

故郷で働けることに喜び

PMSの事業は地元住民を雇用するので、工事はスムーズに進行し、彼らは故郷で働くことによって収入を得、家族を養うことが出来ます。ですから地域住民はPMSとそこで働く職員そしてPMSを率いるドクターナカムラにとっても感謝しています。

また活動地の灌漑問題を解決するためにマルワリード用水路を建設しました。それにより住民は多くの恩恵を享受し、家計の増収にもつながりました。

マルワリード用水路が完成すると、PMSはカマ郡とベスード郡に灌漑施設を建設することを決めました。それは同地域住民が必要としており、PMSも彼らが直面している、川から畑へ水を引き込む問題を解決することにしましたからです。クナル河領域の住民の状況を考えると、カマ取水口の工事はカマ地域住民が抱える取水問題を解決するための最も重要な事業と言えます。

私がPMS職員として工事現場の作業員に給与を支払いにいくと、彼らはPMS職員、中村先生そして日本の皆さんへの感謝の気持ちをあらわにして大変喜びます。そして今日もカマ村の人たちは、カマ取水口から引いた水を使う度にPMS事業のこと

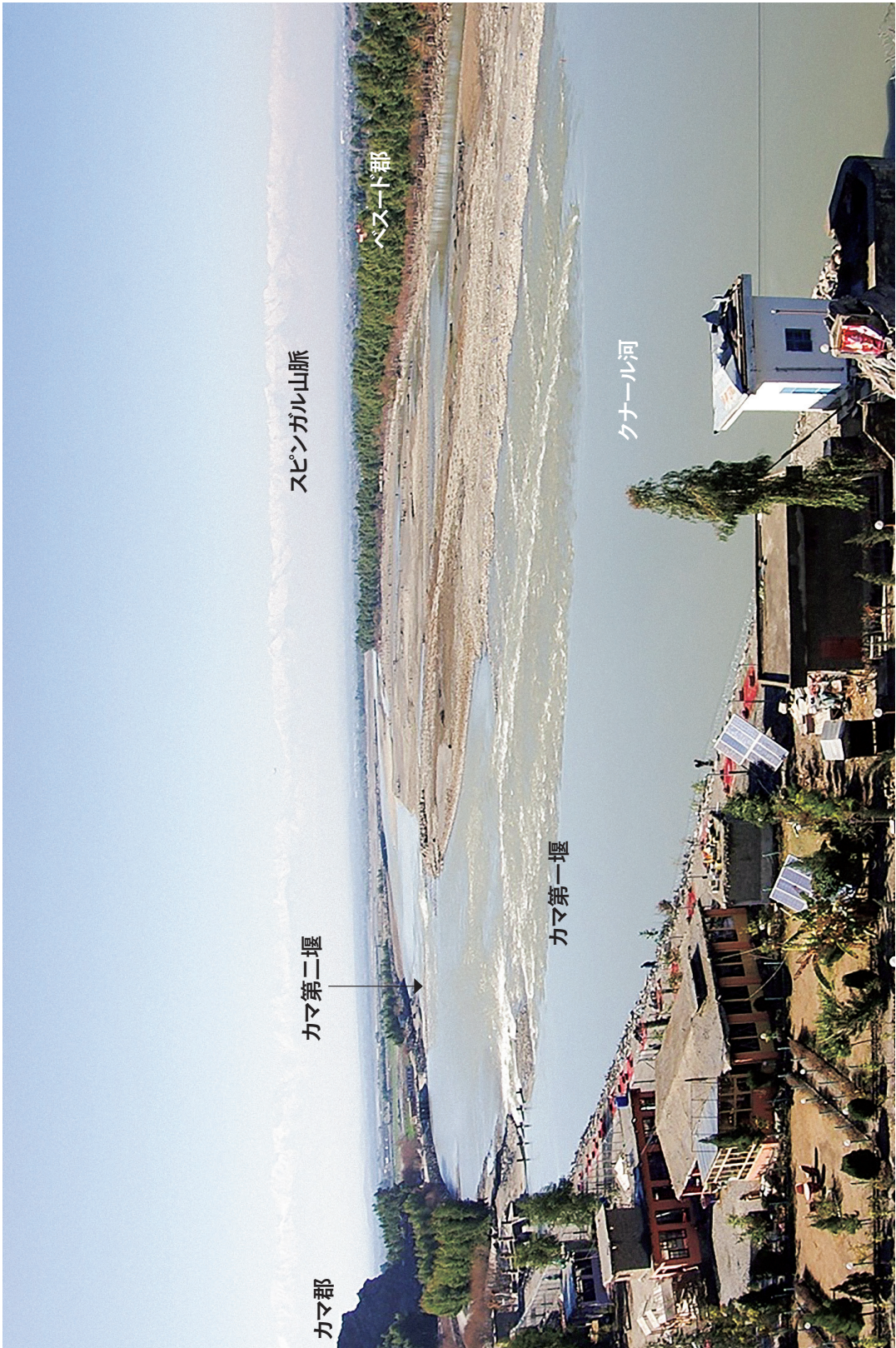


カービル家の食事風景

を思い起こし、心から感謝の気持ちを感じています。

▼未使用の切手、書き損じハガキ（官製ハガキ・年賀ハガキ）をお送り下さい

*引き出しの中などに眠っているものをお送りいただければ幸いです。会報発送等に使用させていただきます大変助かっております。なお、外国の切手は取り扱っておりません。



高台から見るカマ第一堰全景。目指してきた「山田堰の生きたモデル」が実現した。治安の良いカマ郡は人々の往来も盛んでも訪問客も多い。ナンガラハル州最大の穀倉地帯であるカマ郡の農地約7,000ヘクタールを潤す。写真右手が上流（2019年2月22日）



地図は『天、共に在り』（中村哲著／NHK出版）より転載し追記しています

◎カラー連載
マルワリード用水路を行く①
取水堰・取水門、A・B地区
 (0~900m地点)



PMSが初めて着手した用水路取水門建設工事開始直後(2004年1月)



3月の用水路建設工に向け打合せ中の中村医師とエンジニアディダール。PMSジャラバード事務所(2003年2月)



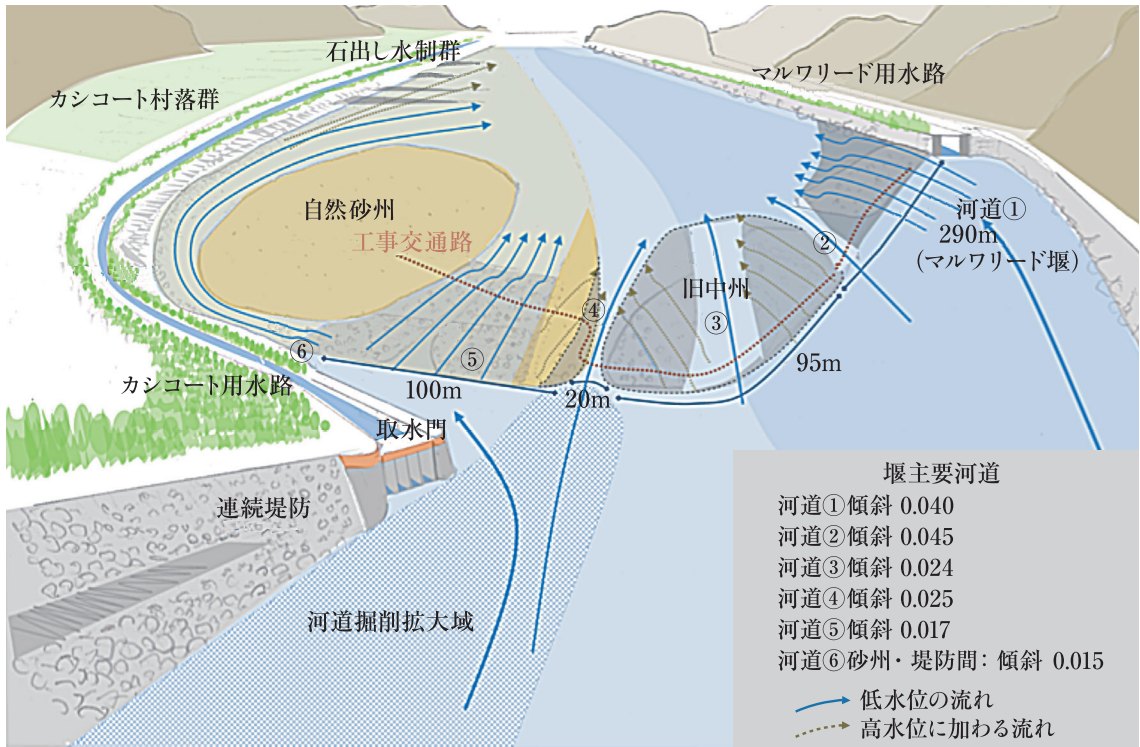
堰の造成工事で河に投入する巨礫を積んだダンプカーを誘導する中村医師(2004年3月)



[上] 2004年に完成したマルワリード取水門。頻りに洪水を経験しているがびくともせず、村や農地を守ってきた(2007年3月)。今秋は間口を拡張し堰の負担を軽くする工事を予定している。



掘削中のマルワリード用水路A地区(左上、2003年9月)と、通水5年後の同地点。用水路両壁は蛇籠工、その背面に柳枝工が施されている(2009年4月)



マルワリード=カシコート連続堰概念図



マルワリード=カシコート連続堰全景。全堰幅(越流線)は505m、堰の面積は約25,000㎡にまで及ぶ。シェイワ郡の田畑約4,700ヘクタールを潤している(2014年4月)

現地活動の来し方を学んだ旅 ——ペシャワール訪問記

PMS支援室

浦田菖平

活動の原点、ペシャワールへ

ペシャワールの西隣ノーシエラ市ピール
ピーアイ村から車で三〇分ほど山の方へ登

ったところの丘では、時々遠くから国軍の軍事訓練による爆撃音が響いてくる。少し冷やかな風がすすきの穂を揺らし、静寂と澄んだ空気はつい深呼吸をしたくなる。遠くに見えるインダス河を遡ればPMSが現在取水設備を整えているクナルル河にたどりつく。カイバル峠を越えたらジャララバードはすぐ近くにあるのに、治安の関係上、二〇一六年夏に渡航して以来、アフガニスタンの地を踏めずにいる。

二〇一八年一月二六日から一二月二日

会報表紙画の画家 甲斐大策氏が逝去されました

6月、福岡市で遺作展が開催されます

会報の表紙画と物語を提供して下さっていた画家・作家の甲斐大策さんが2019年1月15日、逝去されました。甲斐さんは1937年旧満洲大連市に生まれ、早稲田大学で東洋美術史を専攻、1968年以降、パキスタンやアフガニスタンを中心に旅を重ねてこられました。現地の人や風土、文物を愛し、油彩から水墨、ガラス絵、ペン画等、多彩な画風で活躍されました。当会報には1990年の25号から前号まで28年に亘り表紙画と物語を書きおろして下さり、1999年からは当会カレンダーの絵も担当されました。この6月、甲斐さんの長年に亘る画業を振り返る遺作展が開催されます。事務局一同、心からの感謝と哀悼の意を表しますとともに、皆様のご来場をお願い申し上げます。

甲斐大策遺作展

2019年6月4日(火)～9日(日)

11～17時 *最終日は16時まで

於・村岡屋ギャラリー

(福岡市中央区天神 2-8-237 新天町南通り)

主催・甲斐大策遺作展実行委員会

にかけて、PMS支援室メンバーでパキスタン・ペシャワールを訪れた。今回の目的はパシュトゥン民族の地であるペシャワールでその文化に触れること、パシュトゥン語の会話に慣れること、そして中村医師の活動の原点を見ることであった。二〇一六年にアフガニスタンに渡航した際には、ほとんど外出することができず、その地の人々と話すことができなかったため、今回バザールや街中を散策できると聞き、意気揚々として旅立った。

バザールではパシュトゥン語で挨拶

現地に到着した次の日、まず現地衣装のシャルワルカミーズを手に入れるために宿の近くのボードバザールに出かけた。外国人がこの地には珍しいせいか普段の私服だと目立ち過ぎるのだ。

バザールに入るとその勢いに圧倒される。いろんなところから声がかかる。かわいい子供たちはお金のジュエスチャーをしながらずつとついてくる。出店に並べられている野菜たちは整然と彩りよく高く積み上げられている。おそらくここまでインスタ映えする八百屋さんは日本にはないだろう。

「ウローラ！ウローラ！（兄弟よ！）」と言う呼び声の方向を見ると手招きされてい



現地で人気のカバブ屋で値段を交渉中（写真後方中央が筆者）

る。本当にどこに行ってもチャイを勧められる（社交辞令の場合が多いため、断るのが礼儀とのこと）。

今回は現地の人と沢山話した。パシュトゥン語は挨拶から始まる。目が合うと、握手をしながら「こんにちは。お元気ですか。家族もお元気ですか」と様々なことを聞く。以前は何故このように沢山尋ねるのかと違和感があったのだが、徐々に慣れてきた。むしろこの挨拶は非常に会話に発展しやすい

ことに今回気付いた。挨拶に続き、外国人ということもあり色々尋ねられるし、こちらでも尋ねやすいのだ。日本でもきつとこれは応用できそうである。日頃よりPMS職員と電話などで話すことで少しずつ形になってきたパシュトゥン語を使い、初対面のパシュトゥン人と会話できることがものすごく嬉しかった。

女性の自立支援のNGOを訪問

イクラム元PMS病院事務長の紹介でピールピーアイ村にある夫と死別した女性や障害を持つ女性に社会的支援をするWHISPERという団体を訪れた。ここではそうした女性達が裁縫の技術を学び、一人前のものを作れるようになることと共に卒業していく。またWHISPER自体にもイード前などの衣装を揃える時期はオーダーメイドの注文が入る。イクラム氏はこの団体を資金的な面で支援をしている。

代表のシーマさんがこの女性は写真を撮撮られても気にしないように指導していきすとおっしゃるので、生徒さん達にカメラを向けると、シヨールで顔を覆い下を向く。申し訳なく思うと同時に、それだけ女性は顔を見せないという文化が根付いているのだと改めて思った。

施設内には卒業生が作った手作りの衣装が飾られている。これを見て生徒達は意欲を高める。この施設の運営はシーマさんの家族が行っている。シーマさんが困っている女性のために何かしたいと思ったことがきっかけで、それをお父さんのババさんが全面的に応援したとのこと。今でも渉外はババさんが担当している。

一室には学校のような模型があった。WHISPERの将来像だ。広い敷地に裁縫を教える学校と商業施設が一緒になったゆとりのある空間だった。「夢は目に見える形にしていた方が良い」とシーマさん。夢が実現した時には是非また訪れてみたい。

空っぽの難民キャンプで浮かぶ景色

この旅ではまた、PMS病院や水路事業の参考のために中村医師が訪れたサイフォンや水道橋の見学に行った。いくつかの難民キャンプも訪れた。しかし、訪れた全ての難民キャンプが強制帰還により、見渡す限りの広大な更地となっていた。建物も残っておらず、面影もほとんどなかった。

ここでふとPMSの変遷を考えてみた。中村医師は現地に来て三十余年、こんなに長くなるとは当時は思っていなかったと語っていた。私が生まれる前から戦乱や貧困

の中、病氣と干ばつに取り組んできた。当たり前のことだが、きっとその時間はただ過ぎていったものではなく、講演や著作などにも表れていない様々な出来事と日常が積み重なってきたものだっただろう。この地の人々と打ち解けるのにも、信頼を得ることにも、中村医師とPMS職員の弛まな（ゆる）い努力があったのだろう。今度職員がまた来日した際には、昔の話を聞きたいと思う。こんなことを何も無いジャローザイ難民キャンプの景色を思い出しながら、今でも物思いにふけている。

今回感じた沢山の「気がする」をこれから現地と関わっていくに当たって、「経験」としていき、自分自身の芯の中に取り込んでいきたい。

全体を通して本当に甲斐大策さんの絵画の世界のようで、興味深く魅惑的な土地だった。他にも迷宮のようなオールドバザールの話や絶品カバブの話などもあるが、とりとめのない内容になってしまうので、この辺で。

今回付きっきりで案内をしてくださった元PMS病院事務長のイクラムラ氏と元PMS病院看護師のファズレワヒッドさん、日本で無事を祈って下さった方々に心からの感謝を申し上げます。

PMS訓練所の受講生によるトレーニングの感想

ラグマン州農業委員会

ラグマン州農業委員会 設計部門責任者
Dadmanish (Refa) 技師 / Muhmmad Agha 技師

このトレーニングは我々にとって大変有益なもので、多くのことを学び、農業・灌漑の実践的なことをたくさん見学し、授業でディスカッションをしました。それは我々にとって重要なことでした。PMSが用水路の護岸のために用いている全てのものは地元で手に入る資材で、コストも安く、効果的なものです。講師の方々もすばらしく、我々の質問全てに答えを与えてくれました。流速計や水深計などPMSが使用している機器は、我々の仕事の効率を高めるためにも必要なもので、農業委員会に寄付されることを望んでいます。

ラグマン大学卒業生

Kareem Ullah(Haleemzai)

私たち全員がこのトレーニングに参加し、高い評価をしています。教育内容から多くの肯定的な結果を得て、多くを学び、私たち自身の仕事にもたいへん役に立つものでした。

私たちはPMSの倫理観と教育的意見に影響を受けました。我が国の繁栄と国民に関してのPMSの指導に今後も従いたいと思います。国民に奉仕できるよう私と彼らに神様のご加護がありますように。ありがとうございました。

PMS水利事業は 紛争解決策の道標

国連食糧農業機関(FAO)
前アフガニスタン事務所長(現インド事務所長)

七里富雄

コミュニティの安定化と雇用創出

二〇一九年四月に実施予定だった大統領選が延期になり政治混乱及び治安悪化が続くアフガニスタン。その中でFAOはPMSジャパンと共同事業(日本政府支援)を実施している。

私が初めてアフガニスタン東部の、パキスタン国境と接するナンガルハル州ガンベリ沙漠で実施されている「緑の大地計画」の現場を訪問したのが二〇一五年七月。それ以前からアフガン東部の同州バテイコット郡に出張するたびに、現地に根差した活動をしているPMSジャパンのことは聞き及んでいた。日本人が現地に張り付き先頭に立ち、重機を動かし、現地アフガニ人をまとめて長期的な展望の下、住民の支援を得てプロジェクトが実施されていることを。二〇〇二年に立案された「緑の大地計画」は、ナンガルハル州ジャラバード北部3郡を緑化して穀倉地帯へと復活させ、ガン

ベリ沙漠をも田畑に変化させつつある。コミュニティ安定化と雇用創出をもたらしていたのがPMS水利灌漑事業である。

FAOとPMSとの共同事業計画を策定していた時の中村哲先生の言葉を思い出す。「百の診療所よりも一本の用水路を」。なぜ医療活動から水利灌漑事業への展開に至ったのか。なぜクナル河流域なのか。アフガニスタンはテロには決して屈しないが早業には勝てないし、自給できない村落からは人は去って行く。「水資源」は、アフガンの特殊性でもある『相異なる民族や地域性が寄せ集まった「民族の花束」』の中では「紛争の火種」にもなり、食糧安全保障という根本的な問題を抱えているのがアフガニスタンである。

PMS手法の浸透を図る

FAOとPMSとの共同事業の主目的は、PMS水利灌漑事業手法のアフガン社会での浸透を図ることである。政府所管としては、農業灌漑牧畜省、水資源エネルギー省、及び農村復興開発省が水資源に関与している。それら首都カブールでの関係省庁および現場の政府出先機関の調整だけにとどまらず、現地有力者、威力妨害者や忽然と土地占有者らが出現、それへの対応に苦慮することが多々あるのが実態である。それだけ「水資源」は、生存に直結するだけに、紛争

の火種となる所以である。その解決策への道標となるのが、PMS水利灌漑事業と言える。FAOとPMSとの共同事業での中核となる事業は、①ミラーン訓練所建設、②訓練所のアフガン農民および政府技官へPMS水利灌漑事業の手法の普及研修、③訓練教材作成及び普及である。

この共同事業がスタートしてから、カマ堰やマルワリード堰のモデルとなる日本で唯一の石張堰である山田堰(福岡県朝倉市)を見学し、筑後川河川事務所および山田堰土地改良区・水利組合の方々から山田堰の歴史的背景や保全の取り組みを聞いた。土地や農民を水害・旱害から守るため治水問題の解決を図ってきた歴史がここにある。訓練教材の一部として提供された山田堰模型及び山田堰ドローン俯瞰撮影映像は、山田堰に関わる方々のご協力によって完成したものであることをここに記したい。

訓練教材のテキストとなるものは、PMSが「緑の大地計画」を通じて蓄積してきた知見を集大成したものである。普及研修に利用することから、英語および現地語(パシュトゥーン語およびダリ語)に翻訳されている。また、ミラーン訓練所は、山田堰をモデルにしたミラーン堰に隣接し、アフガン農民や技官の現地研修の場となっている。余談になるが、PMS水利事業により、それまで無価値だった河川際の土地が優良土

地物件になることが明白になるにつれ、ミラン訓練所の土地確保が土地権利書として関係省庁から合法的に認定される経緯が思い起こされる。これは中村哲先生やPMS地元関係者の力強い協力があって成しえたことである。

PMS事業が雇用を促進

FAOの対アフガン国向けの戦略は、飢餓と貧困を終わらせるという目標達成の為に五つの柱から構成されている。

- ① 飢餓・食料不安・栄養不良の撲滅支援、
- ② 農林水産業の生産性・持続性の向上、
- ③ 農村の貧困削減、
- ④ 包括的かつ効率的な農業・食料システム



FAO 視察団のマルワリードⅡ作業現場訪問(右から2人目が七里氏、2017年7月23日)

の構築、

⑤ 気候変動・災害に対する生計のレジリエンス強化。レジリエンスとは読者の中であまり聞きなれない言葉であるかもしれないが、「防災力、回復力、被害を最小化して機能を速やかに回復できるしなやかな強靱さ」という意味合いを考えていただきたい。この全ての戦略目標を横断的に網羅したのが、PMSの灌漑事業であると位置付けられる。アフガニスタンでは、テロ等による治安悪化や経済的理由により、農村落からの労働力流出が激しく、都市部への流入や反政府組織への参加が増加しているが、農業生産増加による生計向上により帰農を促進させ定住化させることは、治安の安定構築に向けた大きなインパクトにもなると考える。

アフガン各地に点となり面となる

アフガン各州(計三四州)はそれぞれ気候、地形や流域的にも異なる水資源の状況がある。PMS水利灌漑事業モデルは、ただ単に灌漑技術の普及を目指すものではない。ガンベリ沙漠の緑化やカマ堰およびマルワリード堰建設での作業経験で熟練した集団(農村落民)が、どのようにしてコミュニティを自ら維持保全するか、どのようににコミュニティの自立を促していくかを実際に現場で、且つ口頭で伝授することでもある。この方法は、他国から輸入され

たアプローチではなく、アフガン独自のもので、しかもアフガン人個々の農村部に拡げていくことにおいて、PMSで研修した熟練集団の使命が重きを成している。ここでは、ナンガルハル州クナル河流域での「PMS成功例」とは別の「成功例」がアフガン各地に点となり、面となって拡大することを願ってやまない。これは平和構築に繋がってくるものである。

昨年九月よりFAOインド事務所へ異動となり、インド(二九州と七連邦直轄領)の現場を走り回っている。一つの州が一国家並みの人口を抱え、民族宗教の多様性のある各州は農業でも異なっており、さらにはアフガン同様に気候変化の影響を受けている。旧ムガル帝国時代(アフガニスタンからインドを含むインド亜大陸を支配)の歴史をひも解くと、インド農村部で、アフガンとの共通点を見出すことは少なくない。これまで、アジア、アフリカ、及び南米の現場で国際援助に関わってきたが、アフガンの「緑の大地計画」の現場をこの目で見える機会を得て、また中村哲先生及びPMSナンガルハル州及びペシャワール会の皆様と仕事する機会を得たことは私にとって最大の財産であると痛感している。「現地の人々の立場に立ち、現地の文化や価値観を尊重し、現地のために働く」という中村哲先生の言葉が、座右の銘である。

水のよもやま話・番外 飢餓の国 VS 飽食の国

—— 飢餓のない国の精神の飢餓

PMS (平和医療団・日本) 総院長／ベシヤワール会現地代表 中村哲

◆共通の体験が薄れて

最近、「水や川の話ばかりで、ほかに話題はないのか」との声が身の周りであった。さもあるう、浦島太郎なのだ。日本に居ない時間が多く、共通の話題が少なくなっている。現地でも水や川のこと以外は余り考えない。干ばつの危機、治安の悪化——現地の緊迫した動きは戦場にも等しく、ついゆとりがなくなる。

だが、日本の世情を思えば無理もない。水道の蛇口をひねれば水が出て来るし、コンビニに行けば懐具合に応じて好きな食べ物が入る。テレビの番組は四六時中、美食の作り方や、評判の店や料理を紹介する。味見をして「うーん、おいしい！」と叫ぶ場面が頻繁に登場する。悪いことではないが、飢餓の世界から突然戻ってくる者は、違和感を覚える。しかし、それを日本で言うとう座がしらせるから、調子を合わせて仲間外れになるまいとする。すると芝居じみた会話が空疎になり、自分の言葉が失

われていくのだ。

これに情報の洪水が重なり、ペットの死も人間さまの餓死も同列に聞こえる。何とか理解を得ようと説明を試みて、よく通じないことも多い。極端な場合、「日本でも栄養失調の子が問題になっているのに、アフガニスタンどころか」と言う者もある。干ばつと飢餓の関係が分からない者もある。つい怒り心頭、日本の豊かさや便利さを呪う発言が飛び出し、孤立していく。性格が悪ければ犯罪者かテロリストのコースだ。これも良くない。自分だって江戸時代の飢饉の惨状を読んでも、芯から分かっているとは思えない。

かつては飢餓を体験した世代が社会の中堅に居た。今なら凡そ八〇代から上の方々の、男は兵隊に取られ、女は勤労奉仕に駆り出された。戦中戦後は食料欠乏に悩み、財産を食糧に換え、農村にあっては汗して食糧増産に励みながら、生き延びてきた世代だ。彼らが社会の中堅であった時代、飢餓の問題は多くを語ることなく同情と支援

の手が差し伸べられた。空腹を抱えることの苦痛を身に染みて知っているからである。「敗戦直後のことを思えば……」と言いきえればよかった。途上国の飢餓の実態が今ひとつ伝わり難いのは、時代が共有した体験が薄れていることも確かにある。

◆都市化による自然認識のつまづき

しかし、それだけなら問題は永久に解決されない。共感しにくくなったもう一つの背景は、全世界的な都市化である。農業生産に直接かわる機会がなく、食べ物の生産から口に入るまでの過程——生産し、集荷し、食する、そのパターンが実感し難くなってきている。正確に言うと、それを観念の上で処理して特別視しないのだ。これを脳科学者の養老孟司さんは「脳化」と呼び、人間の思考の必然の帰結だが、自然認識のつまづきの開始と見る。自然相手の仕事は思い通りにならないが、観念は容易に操作できる。出来ないことでも出来ると思いつき、入みやすい。水泳の本を読めば泳ぎができる、情報を集めれば全世界が分かる、差別語を言い換えれば差別がなくなる、危機管理マニュアルを作成すれば事故を減らせる——この倒錯はキリがない。市場で実物取引がわずかになったように、現代は言葉の洪水の時代で、実が失われていく時代だ。自分の経験で確認しない知識は偽モノにな

中村哲医師の作品

アフガン・緑の大地計画

伝統に学ぶ灌漑工法と甦る農業【改訂版】

Peace (Japan) Medical Services & ベシャワール会

B3判並製・256頁・オールカラー 1700円(税込)

医者、用水路を拓く

アフガンの大地から世界の虚構に挑む

1800円

ダラエ・ヌールへの道

2000円

ベシャワールにて

1800円

辺境で診る辺境から見る

1800円

医者 井戸を掘る

1800円

医は国境を越えて

2000円

福岡市中央区渡辺通2-3-24
石風社 電話092(714)4838

人は愛するに足り、真心は

信ずるに足る アフガンとの約束

中村哲/澤地久枝(聞き手) 2100円

東京都千代田区一ツ橋2-5-5
岩波書店 電話03(5210)4000

天、共に在り

アフガニスタン
三十年の闘い

中村哲 1600円

東京都渋谷区宇田川町41-1
NHK出版 電話03(3464)7311

税込表記のあるもの以外はすべて本体価格(税別)です

アフガニスタン DVD

用水路が運ぶ
恵みと平和朗読 吉永小百合
3000円(税+送料込)
ベシャワール会製作

りやすいということだ。かつて日本人の大半が農村にルーツを持っていた。職を辞して「邦に帰る」とは、援農で暮らしを立てることであって、無職になることではなかった。行き詰ったとき、いつでも温かく迎えるのが故郷であった。既婚女性の場合は穏やかではないが、「里に帰る」とは、ひとり身になることではなく、婚姻前の家族に戻ることであった。故郷に戻りさえすれば最低限の食べ物には困らず、変わらぬ人間関係が温かく迎え、貧乏でも飢え死にしないという安心感があった。アフガニスタンではないが、生きていく上でカネが余りかからなかったのである。現在のような都市化は農村の衰退と表裏にあり、日本人のふるさと喪失と一体である。しかし、サービス業だけで社会は成り立たないから、誰かが農業や漁業を営まなければならぬ。労働力が足りなくはないが、

知識を崇拝する都市化社会では身体を使う仕事は低く見られる。高学歴の者の仕事ではないような言い方をする向きもある。3K(汚い、きつい、危険)と言いい、できるだけ手を汚さず、安全な仕事が良いとされる風潮も根強い。つまり農漁業は敬遠され、その分を外国人に頼ることになる。健全な社会とは思えないが、世の中の流れはそうなっている。さらに、交通手段が発達し、お金や物の移動が速やかになった現在、「必要なら外国から買えばいい」という意見が一般的だ。第一、「経済成長」が現金収入の多寡で量られ、それを増やすのが善だと指導されるから、抗いようがない。農民を支配した昔の武士や貴族でさえ、こんな考えは持たなかった。豊作の祈願は重要な神事であり、武士の大半は農業をも生業とした。亡国などと大袈裟なことを言いたくないが、ご先祖さまが営々と築いて

【PMSの動き】

- (1) F A O—PMS 関連事業の、2019年度のトレーニングが2月より始まりました。
- (2) カマ第二堰改修に続き、第一堰の改修工事がほぼ終了し、2月2日に送水が再開されました。
- (3) PMS ガンベリ農場のフェンス建設が開始されました。
- (4) 2月11日、ガンベリ主幹排水路シギ分岐建設及び農場のフェンス設置の着工式が行われました。

きた遺産がないがしろにするのは、大切なものを失うようで、何だか合点が行かない。かつて「晴耕雨読」とは知識人の理想の生活だった。耕すとは、自然相手の農の営みで、知識に実を伴わせる知恵があったと思われる。人が自然の一部である限り、不自然な都市化は長続きしない。やがて人々がスピードや競争、派手な自己宣伝や奇抜さに疲れ、その空虚さに気づくとき、静かな郷愁を伴って本来の自然との関係が姿を現すような気がしてならない。

●事務局長便り

*干ばつの進行で危機感を募らせておりましたが、いくらか雨に恵まれたことで、ほっとしております。気を緩めるわけにはゆきませんが、カマ堰の完成、それも山田堰に瓜二つの姿に感慨を覚えます。これで耐久性と機能を持つ「標準設計」が成ったことで、大きな峠を越えたということでしょうか。この事業については、四期にわたるJICAとの共同事業があったことも忘れられません。またPMS方式の普及については、FAOとの共同事業による訓練所の建設と研修事業の開始もあります。関係者の方々に深く感謝いたします。

*三〇年近くにわたり、会報の表紙画を描いていただいた甲斐大策氏が、一月一日に亡くなられました。八一歳でした。大連に生まれ、ご母堂の故郷福岡県の福岡に引き上げてきた甲斐さんは、一九六〇年代の終わりからアフガニスタンに言い始め、ヒンドゥック山系に生きる人々の暮らしや移動民の生を描き続けました。その画業の一端は、会発行のカレンダーでうかがうことができましたが、それも今年で最後となりました。また、甲斐さんは作家としても優れた作品を残されています。なかでも「生命の風物語」、「シャリマル」は、アフガンを深く知るためにもぜひ読んでいただきたい小説です。ご冥福をお祈りいたします。

*六月一日の総会をもって、事務局長が交代をいたします。新事務局長は古川正敏氏で、福元満治事務局長（広報担当理事兼任）は、広報担当理事として残ります。

●PMS支援室より

*一月から取組んでいた、現地の二〇一八年度の会計監査に備えての資料作成、経済省およびナンガラハル州財務局への会計報告書の作成が終わり一息ついています。以上は現地職員たちと対になっている作業になり、この期間はいっつも増して現地との連絡が密になります。主にジヤ医師と、二〇〇〇年の井戸掘削事業の途中から会計担当になった、

エンジニア ハニフラと協議しますが、現地側の多忙さと真剣な取り組みに私たち支援室が対応できているだろうかと省みる時期でもあります。

*今年も、現地職員の日を二回予定しています。彼らも、日本側の私たちもメールや電話での伝達が難しいことや、大小山のようにある彼らに尋ねたい事などを、顔を見て直接協議できる機会ともなっています。

*今号から、カラーの特集頁で医療団体のPMSが初めて建設した「マルワリード用水路」の取水口から最終地点二七kmまで追ってゆきます。そうは言いましても、寄り道はできませんので、何かカラー特集としてご希望がございましたらベシャワール会事務局内「会報編集部」へお手紙をお送り下さい。

（へ）村から

*「あなたたち日本人はなぜ、私たちのために働いてくれるのですか？なぜ、寄付をしてくれるのですか？」。昨年十一月、現地から研修のため来日されたジヤ先生が、交流会で私たちに投げかけられた質問です。農業・土木の研修を終えられ、最終日に行われた事務局での交流会は、ボランティアを含む四十名ほどが参加した茶話会のようなものです。お茶とお菓子、果物を並べ、十名ほどのグループに分かれて、現地のスタッフたちにいろいろと質問していました。家族のこと、作業の進め方、教育のこと、日本の印象など。話ほとんど広がり、肩の凝らない身近な交流がどれほど大切に改めて感じました。ジヤ先生の冒頭の質問は、会の終了間際に出たものです。私たちにとっては当然ではあっても、それは究極の問いであり、会の原点を問い直すかのような質問に思え、逆に答えに窮してしまいました。次回、同じ質問が出たらどうお答えするか、考える日々です。（Y・M）

□訂正

*前号の会報12頁の写真説明が不十分でした。「残務工事」を「用水路の蛇かご工や柳枝工他付帯工事」と訂正致します。

会 則

- ①本会の名称をベシャワール会とする。
 - ②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州（現パクトゥンクワ州）ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な広報・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。
 - ③本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。
 - ④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
 - ⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
 - ⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。
 - ⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。
 - ⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。
 - ⑨本会の事務局を
〒八一〇—〇〇〇三 福岡市中央区春吉
一—二六一八 VEGA天神南六〇一号
TEL〇九二—七三一—二三七二内におく。
- 総会、現地報告会は、原則として六月の第一土曜日に開催いたします。